腎炎，無症候性血尿及び蛋白尿に続いて，第三位を占め，85例（11%）であった。これらについて，年齢・性及び組織病型分類を試み，治療法に困難を感ずる病態の2症例を取り上げ最近の治療法を呈示した。

7. 肺ノカルジア症の1例

杉田敏夫（上都賀総合）

患者は肺炎症状を呈した74歳の男性で，喀痰培養より連続的にノカルジアを証明した。サルファ剤投与により菌陰性化，症状改善を見た。本例は大酒による低タンパク血症がその主因と思われるが，免疫グロブリン異常等もあり，その基礎疾患の有無に関しては目下検索中である。本症は本邦では現在まで約30例の報告しかないが，ステロイド剤，免疫抑制剤等の投与により今後増加する可能性もあり，注意すべき疾患であると思われる。

8. 野兎病の1例

伏島堅二（君津中央）

野兎病は，千葉県においては，三輪らの報告が，あるごとく，本県の一地方病として着目されている。今回一患者を診療する機会を得たが，本例は，野兎の剝皮料理によって，両側手指より感染した野兎病で，両側腋窩リンパ節腫脹を来たしていた。菌侵入門戸として，両側手指の潰瘍も発見し得た例で，興味あるので，報告した。

9. 糖尿病患者におけるグラム陰性桿菌敗血症の2症例

檜山幸孝，福永和雄（キッコーマン総合）

症例1　45歳主婦。腎盂炎症状あり入院。血培にて大腸菌（+）尿培（−）。DKB等で治療。症例2　47歳主婦。腎盂炎あり血・尿培で肺炎桿菌（+），DKB等で治療するも膀胱炎を繰返す。尿路感染は糖尿病患者では健常人より高頻度であるといわれるが，敗血症に至るものは稀であり，危険因子の点からも症例2には腎症・尿路感染歴があり，症例1にはいずれもなく興味深いのでここに報告いたします。

10. 胆道系造影における医原感染とその対策

○菅野治重，菊池典雄，小林章男
（千大・検査部）

昨年7月より11月にかけて千葉県下8医療施設で十二指腸ファイバーの細菌汚染について調査し，12本中10本より細菌を検出，内9本は緑膿菌であった。ERCP後胆道感染の原因となるため洗浄法の検討を行なった結果，指定消毒剤である逆性石鹸200倍液は緑膿菌に対しMICで38%しか効果がなく変更の必要がある。またブラッシングの効果は予想以上に大きく必ず施行すべきであり，その後で可能な限りEOG滅菌をすべきである。

11. 千葉大学病院最近4年間における血中分離菌種と感受性

菊池典雄，菅野治重，小林章男
（千大・検査部）

過去4年間の血液培養陽性例は290余例でありその70%がグラム陰性桿菌によるものであった。グラム（−）菌の検出頻度は，大腸菌，クレブシェラ，緑膿菌‥‥の順であったが，ここ1～2年では，緑膿菌，クレブシェラの減少に対し，セラチア，バクテロイデスの増加が目立った。各種抗生剤使用による耐性菌の出現，菌交代症，また各種検査法，術式の進歩に伴う院内感染の増加など我々臨床家は常に念頭に入れておかなければならない。

12. Dubin-Johnson 症候群の2例

寺田洋臣，浅田　学（旭中央）

症例1，37歳♂，主訴黄疸。近親結婚。同胞1人に黄疸(+)，T.Bil 2.2mg/dl，D.Bil 1.5mg/dl，BSP再上昇(+)。腹腔鏡：表面平滑な黒色肝。病理は褐色色素を認め電顕で多数のlysosomeを認む典型的な例。症例2，66歳♂，主訴黄疸。孫娘にWilson氏病(+)。T.Bil 3.1mg/dl，D.Bil 2.3mg/dl。腹腔鏡：線維化を伴う黒色肝。病理は色素顆粒を認め，電顕でlysosomeを認めBSPの再上昇のないD-J症候群であった。後者にニコチン酸負荷を行った所，間接ビの軽度上昇を見た。

13. 肝炎多発が疑われる地区の症例について

内海勝夫，高橋法昭，高相豊太郎
金田丞亮
（清水厚生）

当院外来患者を対象にして，清水市東部の清見寺を中心とした地区に他より多くの肝疾患患者および急性肝炎患者が存在することを示す。HBs抗原陽性者は少ない。この地区に多い理由ははっきりしない。夫婦間感染と考えられる急性肝炎2症例を示す。